

家を新築するときには、地鎮祭や棟上げなど、無事竣工を祈願する儀式が行われ、竣工するとこれを祝う新築祝が催されるのが普通である。これには全国各地それぞれに独自の形式があるが、沖縄地方で行われる家造り着工の際の風習と新築祝について紹介してみよう。

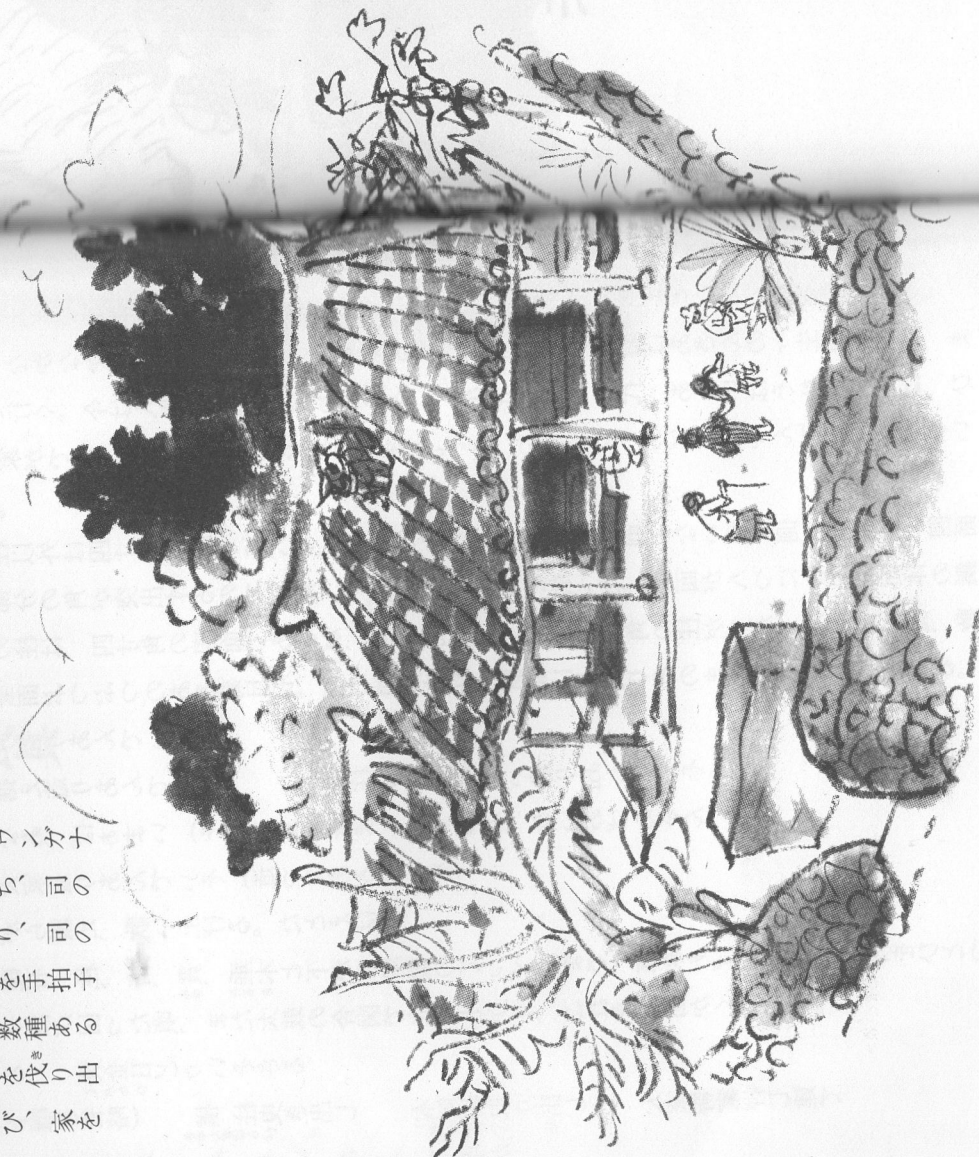
これは、本建築の住家を建てる場合である。

まず、平面図のとおりに縄を張り、礎石を据える。次いで縄張りの中央の礎石に中柱（大黒柱）を立て、ユピト木（和名ヤンバルアワブキ）の葉付きの小枝にチガヤを一つかみ抜いて添え（これをユピトウナガナシという）、柱に結わえる。このユピトウナガナシは屋根が葺き上がるまでそのまま結わえておく。ユピトウとは「結い人」順ぐりに行う共同作業の人数、カナシは最高の敬称で、シは上下の接続詞。つまり協同一致のシンボルである。

家が竣工すると、村落中の人びとの協力援助に感謝し、できた家をほめ讃える儀式が行われる。大工の棟梁を上座に、村の長老以下を招き、感謝と慰労の宴も兼ねる。

村の神司（女性。祭祀を司る）が家主、棟梁を従えて中柱に香炉を据え、線香をたいて新築した家の守護神を招致する。「家かざし」の願いである。これがすんで家主が一同に謝辞を述べ、儀式と祝宴を交互に行う。

やがて棟梁がユピトウナガナシを取り外して捧げ持ち、司の太鼓でみなが立ち上がり、司の音頭で「家崇び」の歌を手拍子を合わせて歌う。歌は数種あるが、最初に山から材木を伐り出し、運搬する苦勞を偲び、家を建てた喜びを表す歌。



へ大山の底から ホーイ、ヨーホー ザーラー、ホーイシヨウが
長山の奥から (以下囃を省略) 横柱曳き出し 木斛桁取り出し 大家新家押し建て
今日の日どウ嬉さる 黄金日どウいそさる

終わって着席。一通り酒が回った頃、また太鼓の合図で立ち上がり、これを何回かくり返す。

次は新築した家を、礎石、柱、桁、貫、垂木と下から屋根のてっぺんまで、葺きあげるまでの材料をひとつひとつ美しく形容しながら讃え、歌い上げる。たとえば、

へ我が島の真中に、大家造りあんでいそ (造つてあるそうな)

うりゆ見りおら、なあ、ばあまい (それを見て来ましょうねえ、ひいおばあさん)

丸地玉礎石ばし 据え造りあんでいそ 八側金柱ばし 建てい造りあんでいそ

四側金桁ばし 受け造りあんでいそ

(丸地玉＝球形で全面ぶつぶつのある菊目石。石の傾きを柱の断面ほど削りそのまま礎石として据える。

八側金＝普通、家の柱は、四寸角の四面であるが、西表島は五寸角、六寸角の柱が多かった。畳の面、敷居、縁側と接する部分の角が突出するので、幅二、三寸ほどに角を削った。側面が八つになる八面体の銅鉄の意。四側金＝柱以外は四寸角、四寸に六寸、同八寸などあるが、角を削らないので側面は四つ。四面体の銅鉄……の意。)

「私たちの村で大きな家ができたそうよ、それを見て来ましょう、ねえ、ひいおばあちゃん」とひ孫がひいおばあさんの手を引いて行く。今は人生八〇年と言われるが、人生五〇年の時代、あるいはそれ以前では、ひ孫を見るほどの長命は、なかなかのことだった。ひ孫を見るまで長命したひいおばあさんの一生のうちで、まだ見たことのないほどの大きな家というのが、新築落成した家に対する最高の讃えとなっているのである。

（大山の底から ホーイ、ヨーホー ザーラー、ホーイシヨウが

長山の奥から（以下囃を省略） 槇柱曳き出し 木斜桁取り出し 大家新家押し建て

今日の日どウ嬉さる 黄金日どウいそさる

終わって着席。一通り酒が回った頃、また太鼓の合図で立ち上がり、これを何回かくり返す。

次は新築した家を、礎石、柱、桁、貫、垂木と下から屋根のてっぺんまで、葺きあげるまでの材料をひとつひとつ美しく形容しながら讃え、歌い上げる。たとえば、

（我が島の真中に、大家造りあんでいそ（造つてあるそうな）

うりゆ見りおら、なあ、ばあまい（それを見て来ましようねえ、ひいおばあさん）

丸地玉礎石ばし 据え造りあんでいそ 八側金柱ばし 建てい造りあんでいそ

四側金桁ばし 受け造りあんでいそ

（丸地玉＝球形で全面ぶつぶつのある菊目石。石の傾きを柱の断面ほど削りそのまま礎石として据える。

八側金＝普通、家の柱は、四寸角の四面であるが、西表島は五寸角、六寸角の柱が多かった。畳の面、敷居、縁側と接する部分の角が突出するので、幅一、二丈ほどに角を削った。側面が八つになる八面体の鋼鉄の意。四側金＝柱以外は四寸角、四寸に六寸、同八寸などあるが、角を削らないので側面は四つ。四面体の鋼鉄……の意）。

「私たちの村で大きな家ができたそうよ、それを見て来ましよう、ねえ、ひいおばあちゃん」とひ孫がひいおばあさんの手を引いて行く。今は人生八〇年と言われるが、人生五〇年の時代、あるいはそれ以前では、ひ孫を見るほどの長命は、なかなかのことだった。ひ孫を見るまで長命したひいおばあさんの一生のうちで、まだ見たことのないほどの大きな家というのが、新築落成した家に対する最高の讃えとなっているのである。

●編者略歴

木村尚三郎(きむら しやうざぶろう)

1930年東京生まれ。東京大学西洋史学科卒。東京大学教授。フランス中世史専攻。

著書一『「耕す文化」の時代』(ダイヤモンド社),『和魂和才のすすめ』(日本経済新聞社),『家族の時代』(新潮社)など多数。

筒井迪夫(つつい みちお)

1925年福井県生まれ。東京大学農学部林学科卒。東京大学名誉教授。林政学・森林文学専攻。

著書一『山と木と日本人』(朝日新聞社),『く子どもと読む 木と森の文化史』(朝日新聞社),『緑と文明の構図』(東京大学出版会)など多数。

無断複写、転載を禁ず。落丁、乱丁のときはお取りかえいたします。

©Nihon Ringyo Kyokai 1990 Printed in Japan



制作 株式会社第一プランニングセンター
印刷・製本 中央精版印刷株式会社

発行 社団法人日本林業協会
東京都千代田区永田町二一四一二
永田町ビル四階 郵便番号一〇〇
電話〇三二五八一―二三三八

企画 森の生活文化研究会
監修 林野庁

編者 木村尚三郎・筒井迪夫

定価 二五〇〇円(本体二四二七円)

発行 一九九〇年三月二十九日第一刷

森の生活ドラマ 100

●編者略歴

木村尚三郎(きむら しょうざぶろう)

1930年東京生まれ。東京大学西洋史学科卒。東京大学教授。フランス中世史専攻。

著書—『耕す文化』の時代』(ダイアモンド社),『和魂和才のすすめ』(日本経済新聞社),『家族の時代』(新潮社)など多数。

筒井迪夫(つつい みちお)

1925年福井県生まれ。東京大学農学部林学科卒。東京大学名誉教授。林政学・森林文学専攻。

著書—『山と木と日本人』(朝日新聞社),『く子どもと読む』木と森の文化史』(朝日新聞社),『緑と文明の構図』(東京大学出版会)など多数。

森の生活ドラマ 100

発行 一九九〇年三月二十九日第一刷

定価 二五〇〇円(本体二四二七円)

編者 木村尚三郎・筒井迪夫

監修 林野庁

企画 森の生活文化研究会

発行 社団法人日本林業協会

東京都千代田区永田町二一四一二

永田町ビル四階 郵便番号一〇〇

電話〇三二五八一一一三三八

制作 株式会社第一プランニングセンター

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

無断複写、転載を禁ず。落丁、乱丁のときはお取りかえいたします。

©Nihon Ringyo Kyokai 1990 Printed in Japan

